

■ 国語科

1 「自分の世界を広げよう」と思ったら、「国語」を勉強しよう！！

「自分の世界を広げよう」と聞いて、あなたはそのためどんな行動をしたらよいと思いますか？日本を飛び出して海外の文化を肌で感じるのが一番と思う人もいれば、ボランティアに参加して社会に貢献する経験をするのが大切だと思う人もいるかもしれません。どちらも、今の生活では気づけないことに自分を導いてくれる価値のある「行動」ですね。

けれども、ちょっと違った視点からアドバイスをしましょう。「自分の世界を広げよう」と思ったら、「国語」を勉強しましょう。教室で教科書を読むだけで「世界」なんて広がらないよと思うかもしれません。けれども、「ことば」を学び、優れた「表現」を味わい、考えや思いを正確に伝える力を身につけることは、あなたの持つ「世界」を広げるのに必要不可欠なことです。様々なジャンルの論理的な文章や深く人間を考察した小説を読む「質の高い読書」を通して、文字通り「世界」を広げることができるのも「国語」の魅力です。

高校の国語では多くのことば・表現を学びます。「抽象・具象」「洞察」「^{えんえき}演繹・^{きのう}帰納」「コンテキスト」・・・、「尊大な羞恥心」「精神的向上心」「汚れちまった悲しみ」・・・、「あはれ」「ゆかし」・・・。一つ一つがあなたの世界を広げ、思考を深め、表現を豊かにしてくれます。「なぜ、争いはなくなるのか」「人間が時間から自由になることはできるのか」「生きるためには最小限の悪は許されるのか」「死とは何か、生とは何か」。このような深遠なテーマに取り組んだ評論や小説、古典作品を通して「考える」ことは必ず、あなたの世界を「広く、深く」広げてくれるはずです。

目の前にある文章に取り組む事は、実は一番身近な「自分の世界を広げる」行動なのです。さあ、「自分の世界を広げよう」と思ったら「国語」を勉強しましょう！！

2 なぜ「国語」を学ぶのか？ 「正確に理解し、正確に伝える力」について

普通に「日本語」が話せて、読めて、話せて、日常生活に困っていないのに、なぜわざわざ「国語」を勉強しなければならないのか？ましてや、将来、目にすることもさしてないであろう「古文」や「漢文」の読み方を、なぜ勉強しなければならないのか？たぶん、ほとんどの人が抱いたことがある、そしてこれからも抱くことになる問いではないでしょうか？では、先ほど話した「世界を広げる」とは違った視点から考えてみましょう。

国語の勉強方法についての数多くの著作がある出口^{ひろし}汪さんは、その問いに、「国語とは、相手の言いたいこと、伝えたいことを正確に理解する。そして、自分の伝えたいことを正確に伝えるために勉強する。」と答えています。この「正確に理解し、正確に伝える力」こそが「国語」の目指すものと言えます。ですから、皆さんの国語の勉強には文章を読むだけでなく、自分の考えを発表したり、討論をしたりする活動も含まれるのです。

私たちは「日本語」を通して自分の思いや考えを人に伝え、その理解や共感を得る努力をしています。また、社会の様々な出来事についても、「日本語」を通して、理解し認識しています。その媒体となる「ことば」は、自己と他者をつなぐパイプのような役割を持ち、日常生活のあらゆる場面で活用されています。こうした「ことば」を核として学ぶ「国語」は、すべての学習の基礎となる教科であり、すべての学習の原動力となります。いや、もっと大きな視点に立てば、国語、つまり「ことばと文章と表現」の学習を通して「正確に理解し、正確に伝える力」を身につけることは、人間が「豊かに生きていく原動力」となるものと言えます。

どうですか？「国語」とは、とても大切な、全ての根源に関わる勉強だと思えてきませんか？

3 なぜ「古典」を学ぶのか？

国語の中でも特に「古典」を学ぶ理由に疑問を持つ人は多いのではないのでしょうか？けれども、高校で「古典」を本格的に学習すると、そこに書かれている話題やテーマが、現代の私たちが感じたり、悩んだりしていることとあまりにも一致していることに驚くことが多いものです。つまり、私たちは大げさではなく、何千年も前から、同じように友情に恋に悩み、生きる意味を問い、季節の風物に深く心を打たれて生きてきたこととなります。「悩み、問い、感じる」ことこそが「生きる」ことだと言えるかもしれません。時代を超えた表現を実際にその人が書いた文章で読むということは、私たちが大きな時間の流れの中で目には見えない「心」でつながっていることを再認識させてくれる行為なのです。そして、古典作品を正確に読解して味わうことで、今を生きる自分を見つめ直すことができるのです。

千年以上前に生きた人の文章をその人が書いたままの表現で味わえるのは奇跡みじかいな体験だと思いませんか？

さあ、一緒に国語を読み味わい、考え、表現し、伝えることで「世界」を広げ、「豊かに生きる力」を養いましょう。

■ 社会科（地理歴史科・公民科）

高校社会科（地理歴史科・公民科）の学びとは？

歴史を学ぶことの目的を、過去のことを知るためだと思っていませんか？ 実はそうではありません。極論かもしれませんが、過去に起きたことを正確に記憶しておくことにそれほど意味はないのです。記憶だけなら、これから先の時代、人工知能（AI：Artificial Intelligence）がしてくれるでしょう。それに、過去に起きた本当のこと（＝真実）を正確に知ることは、タイムマシンでもない限り不可能なのです。我々が知ることでできる過去とは、過去に書かれた（描かれた）ものや、残されている遺物（これらを「史料」や「資料」といいます）などから誰かが推測し、何らかの見方や解釈に基づいて構築した、構築物（＝フィクション）としての過去なのです（その内もっとも説得力のあるものが、通説として教科書に載っているのです）。したがって、真実はひとつだとしても、それをもとに構築された「事実」は無数にあるということになります。「邪馬台国論争」や、「戦争責任」等の問題が複雑になる理由はここにあります。見方や解釈が変われば、構築される「事実」も異なったものになるのです。では、そんなあいまいな、答えの出ない問題を学ぶ意味とは何でしょうか？

例えば、「フランス革命」を正確に知ることは、上に述べた理由から不可能です。そもそも、「フランス革命」という言葉さえ、フランス革命の時代にはありません。後の時代の人がつけた名前です。では、フランス革命について学ぶことは無意味だといえるでしょうか？ その時代（今から約230年前）に大きな事件が起きたことは間違いなく、そしてその事件には様々な背景があり、さらにその事件が後の時代に与えた影響も、間違いなく大きなものです。事件の全容を知ることが不可能でも、こうした背景（原因）や事件の経過、その結果や影響を知ることが可能です。こうした見方を通じて、それが「歴史的にみてどのような意味を持つ事件であったのか」を知ることができます。さらに、「身分」や「国家」、「自由」、「人権」といった、現在の社会を理解する上で重要なさまざまな「概念」が登場したことも知ることができます。このように考えると、見方や解釈が定まっておらず、意見が対立している問題でも、それを学ぶことには重要な意味があるといえるのです。

歴史を学ぶ目的とは何でしょうか。それは、現在を理解し、これから先の生き方を決めることにあります。これは答えのない問題です。答えのない問い、つまり AI にも答えられない問いを追究するからこそ、歴史を学ぶ意味があるのです。フランス革命を学ぶ意味は、ルイ16世やマリ＝アントワネット、ナポレオンなどの人物を知ることでも、バスティーユ牢獄やギロチン、人権宣言といった言葉を覚えることでもありません（それは AI に任せましょう）。現在の世界を理解するために必要な「概念」や、時代や地域が違って共通して当てはまる普遍的な歴史の「パターン」が読み取れないだろうか。日本の明治維新のような大きな事件と比べて、共通点や違いは何だろうか。どのような条件がそろったとき、革命のような大きな事件が起きるのだろうか……。このように、過去の歴史を、時代や地域を超えてつなぎ、くらべる思考。こうした「歴史的思考」を身に付けることが、歴史を学ぶ目的なのです。歴史から何を読み取るかは、人によって違っていいのです。人の生き方はそれぞれだからです。自分がこれから先の世界を、よりよく生きていくための「歴史的思考」。これが、AI には不可能な、歴史を通じて身に付けてもらいたい力です。

以上は歴史を学ぶ話でしたが、「原因と結果」、「類似と差異」、「継続と変化」などに着目して物事を見る方法や、ある事象を「5W1H1R（R=result、結果）」の文脈にしたがって論理的に語る力などは、社会科に共通して必要な力であり、授業を通じてこうした力を身に付けていってもらおうことを目指します。皆さんが社会に出て、よりよく生きていくための力を身に付けるため、そして、積極的に社会に関わっていく人になるための力を身に付けるための教科、それが社会科（地理歴史科・公民科）なのです。

■ 数 学

1 「数学は、科学へとつながる鍵とドアである」(ガリレオ・ガリレイの言葉より)

数学には様々な多くの分野があることを知っていますか？中学校までの算数・数学では式の計算、グラフ、図形、確率などの分野を学んできたと思いますが、実はこれらは専門的な用語を使えば次のように分類できます。x や y などの文字を使い「計算」というものを抽象化し、その性質を探る代数学。グラフや関数を利用し、数量の変化や比較を行う解析学。直線・曲線や平面・曲面、または立体などの図形の形や長さの特徴に着目する幾何学。膨大な量のデータから確率を求めたり、推測したりする統計学。これらが有名な数学の分野です。

上で紹介したような分野は、理系学部でのみ必要とされていると思いませんか？実は、数学の様々な分野は、工学や自然科学だけではなく、社会科学、人文科学においてもなくてはならない存在なのです！高校で学習する微分・積分学は解析学の内容であり、経済学において“企業の費用最小化”など多くの場面で用いられます。また、心理学においては実験で集めたデータを統計学を用いて分析し、考察していきます。ここでは書ききれないほど、数学は様々な学問を支えているのです！数学なくしては、様々な科学の発展は起こりえなかったのです。みなさんがどの学問への道へ進んだとしても、きっと数学という学問とは切っても切り離せない関係になるのではないのでしょうか。「数学」は何かを表現・考察する際に便利な“道具”であり、あるいはある一種の“言語”であると言われています。ですから、数学が様々な分野に関わってくるのも当然かもしれませんね。

2 “数学的思考力”は、勉強、スポーツ、仕事…すべてに通用する力です！

「学校で勉強する数学って何の役に立つんだろう…」こんな疑問を持ったことある人はいませんか？小学校までに学習する算数は、日常生活において必要不可欠であるということは納得できるはずですが、中学や高校で学習する難しい数学ができなくても、日常生活には困らないのではないのかと思ったことはありませんか？(受験に必要なので、そこまで疑問を持つ人はいないかもしれませんね。)正直に言うとその通り、困らないのではないかと思います。高校数学は先に書いたような大学などでさらに深く学ぶための準備としての内容であり、それが直接日常生活に役に立つことは少ないと思います。では、「高校数学を学ぶことは、受験以外では必要ない」と考えてよいのでしょうか。答えはNOです！たしかに高校数学は直接役に立つことは少ないのですが、“高校数学を学ぶこと”には大きな意味があります。それは、無意識のうちに“数学的思考力”が鍛えられるからです。

数学では、2つの事柄を明確な根拠をもってつなげる考え方を“数学的思考”と呼びます。与えられた条件から解いていく方法と、結論を示すには何が言えたらいいのかを考える方法とも言えます。大まかに言うと、「○○だから、××である。」という前提条件○○(スタート)から結論××(ゴール)を導く考え方や、「××を示したいから、○○を利用する。」という結論××(ゴール)から逆に分析していく考え方のことです。この“スタートからの道”と“ゴールからの道”を使い分け、あるいはつなぎながら、問題を解いていく考え方を学びます。

この考え方は勉強以外の様々な場面で生きてきます。自分が今どういう現状なのかを分析し、そこからどのような行動ができるか。また、目標とする姿はどのような状態かを分析し、そのためには何が必要なのか。そして、スタートからゴールまでの道をつなげること。これらができれば、どんな場面でも自分が努力すべきことと成功への道筋が見えてくるはずですが。このような考え方は、高校数学を学ぶ中で自然と身に付いていくものです。他にも、自ら仮説を立て、実践し、検証するというプロセスも数学で頻繁に用いるものです。これらの“数学的思考力”を鍛えることが、高校数学を学ぶ最大の意義であると考えています。

3 “分かりやすい説明をする力”を鍛えるのは数学

“分かりやすい説明”に必要な要素とは何でしょうか。1つは「明確な根拠を示す」ことです。他には「抽象的なものをモデル化する」ことで、これは様々な事柄を図やグラフ、数式などで表現するという事です。相手に何かを伝えるときに、それを様々な表し方で伝えると、相手もきっとイメージがしやすいはずですが。このようなモデル化をする作業は、数学をする上では欠かせないものから、無意識のうちにその力は付いていくでしょう。また、「様々な視点から物事を観察する」ことも重要な要素の1つです。例えば図形の問題において、どのように補助線を引くか、図形をどのように見るかなどの様々なパターンを考えることで、物事を観察する眼は鍛えられています。

…たくさんのことを書きましたが、“数学を学ぶ良さ”を分かってもらえましたか？数学を頑張れば勉強すれば、人生が豊かになります。苦しいこともあります。苦しみなしには思考力は鍛えられません。精一杯、数“楽”みましょう！

■ 理 科

1 なぜ理科を学ぶのか

化学 私たちは多くの物質に囲まれ、多くの物質を利用して生活しています。その物質は、わずか 100 種類程度の原子という粒子からできています。化学変化はこの原子の組み合わせの変化であり、自然界・生体内では様々な化学反応が起こっています。

化学の学習では「無から有を生じることはない」という科学的な概念をしっかりと身につけていきます。情報過多の現代において、感覚的にではなく科学的に物事を判断することや、「似非（えせ）科学」に振り回されないことが絶対に必要であり、正しい化学の知識が役に立ちます。

生物 遺伝子操作や iPS 細胞、ヒトゲノム解析など、近年の生命科学の急速な進歩により、分子レベルから生命活動を見つめることができるようになりました。生物学の大きな学習のテーマは「生物の多様性と共通性について考える」ところにあります。つまり、ヒトをはじめとする生物に共通する仕組みや現象を踏まえながら、38 億年の生命の歴史の中で、生物はどのように多様化してきたのか、という全体像を考えることで、個々の生物の「絶妙な生き様」に迫ることができるのです。

生命活動に見られる様々な現象と同じ地球に暮らす生物どうしの繋がりとというグローバルな視点を身につけておくことは、同じ地球環境を生きる生物として不可欠です。

物理 スマホやインターネット、自動車や航空機、防災・減災技術など、私たちは様々な科学技術の恩恵を受けて生活しています。科学技術の発展は「理論の構築により、自然現象を明らかにしてきた」物理学の応用のもとにあります。近年ではエネルギー問題や環境問題が叫ばれ、これらの問題を理解し立ち向かっていくためにもますます物理の学習が重視されています。

「あらゆる事象には必ず理由がある」という物理の考え方は、科学研究の分野に限らず、将来社会に出たときに、様々な場面で必要になってきます。

2 理科はどう学ぶのか ～理科の学習の基本は、「基本事項の暗記と理解」そして「知識の一般化と活用」～

- ① 事前に教科書の内容、とくに「キーワード」に目を通し、意味を調べておきましょう。授業で学ぶ前に、「これは何？」「なぜこんなことが起きる？」という疑問を持つことが大切です。
- ② 授業では、①の疑問を解消できるよう、次のことに主体的に取り組みましょう。
 - 授業内に質問・発言しよう。「軽い質問」の中に、「本質的な問い」があるものです。
 - 先生の話のポイントをメモにとる習慣をつけよう。復習時の記憶喚起に有効です。
- ③ 授業のあった日は必ず復習をしよう。これを身につけるために、次の手順で問題演習に取り組みましょう。
 - まずは自分で解きましょう。（記憶をアウトプットすることで「何ができないか」を自覚できます）
 - 解答例ではなく、ノートやプリント、教科書や図説などを見ながら解きましょう。（記憶を喚起します）
 - 解答例や解説を参照し、解き方を確認しましょう。（疑問点を明確にすることが大切です）
 - 疑問点は、翌日以降に友人や先生に質問しましょう。（質問会や土曜講座も活用できます）
- ④ ①②③を繰り返します。身の回りの現象や新聞・雑誌の記事などにも興味を持ち、知識を広めましょう。

3 学部・学科、そしてその先へ

化学 化学は理系学部のほとんどで入試科目となります。とくに、化学専門学科、農学部・医学部の個別学力試験で課されます。大学の基礎学力としても必要です。

生物 生物学は、医学・薬学・農林水産学・理学などの分野にとどまらず、工学の分野でも広く応用されるようになってきました。就職においても、生物学の研究者を優先的に採用する業種も増えてきています。

物理 物理学はとくに工学部や物理専門学科の入試科目です。また、放射線などの知識は医学部でも、物質の構造と熱の関係は農学部の食品工学でも必要となります。

地学 理系で地学分野を専攻したい人は、高校のうちは化学・生物・物理、そして数学をしっかりと学んでおくことで、大学進学後の地学（地球科学）の勉強がより深く理解できるようになります。

■ 保健体育科

高等学校保健体育では、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習課程を通して、心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する」ことを目標に、中学校では保健体育という一つの教科だったものを、科目「体育」と科目「保健」に分けて詳しく学ぶこととなります。

生涯にわたり、自己実現を図っていくためには、健康であることは必要不可欠です。運動や健康について自他や社会の課題を発見し、「保健」を通して健康に関する正しい知識を身につけ理解を深めるとともに、しっかり考えて計画し、合理的な運動を実践する「体育」に積極的に臨み、たくましい心と体を育んでいきましょう。

1 「保健」を学ぶ

21世紀に入り、国内的にも国際的にも社会情勢は急速に変化してきていますが、私たちはこのような変化に対応するためにも、健康を保つことが大切です。我が国の平均寿命は世界の最高水準にあり、急激に高齢社会を迎えました。しかし、保健医療の内容が充実するなかで、健康に不安を感じている人は少なくありません。高齢者になっても生きがいを持って生活できるような、真の意味の長寿社会を作り上げるためには、若い時期からの健康作りが必要です。保健の授業では、「現代社会と健康」「安全な社会生活」「生涯を通じる健康」「健康を支える環境づくり」の4単元に分けて一生涯の健康生活について学びます。自分自身の健康や自分を取り巻く社会の現状や社会的対策を理解し、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を身につけることで、自分の目標に向けて努力し、健康でよりよい生活を送ることができるよう、しっかり学習しましょう。

2 「体育」を学ぶ

社会環境の変化や個人の意識・価値観が多様化する中で、心身ともに健全な生活を営む上で運動やスポーツが欠かせないという考え方が世間的に広まり、その重要性がますます高まっています。体を動かすということは、精神的に達成感や楽しさなどを与えるとともに、健康の増進や体力の向上にも深く関わっています。また運動やスポーツは、私たちの人生をより豊かに充実させる「生きがい」や「文化」の一部としても、生活に欠くことのできない重要なものです。

本校では、まず集団の一員としての態度を身につけることに重点を置いています。集団として大きな力を発揮するためには何が必要なのかを、毎時間行う集団走、グループ活動を通して学習していきます。扱っている種目は「陸上競技」「バレーボール」「テニス」「バドミントン」「卓球」「サッカー」「バスケットボール」「ソフトボール」「器械運動」「ダンス」です。1年次から選択制授業を導入しており、自分のやりたい種目を選び、自己の能力や適性に応じて取り組みやすくしています。また、体育大会や春と秋の球技大会もあり、体育的行事が充実しています。

本校の体育授業は、先生が全部指示するような一斉授業形式ではありません。毎時間の授業計画は先生や仲間のアドバイスを活かしながら、班長を中心に自分たちで考えます。授業内容や実施方法、それぞれの技術のポイントなどをしっかりとまとめてグループノートを充実させ、その計画に沿って授業を自分たちで進めていく形式で行っていきます。運動が得手不得手にかかわらず、グループ全員の力が伸びていくようアドバイスを相互に行ったり、励ましあったりしながら、運動やスポーツの楽しさ、喜びを体験するとともに、課題を設定し、その課題を自ら解決する能力を身につけるために、積極的に取り組んでいきましょう。

また体育は実技だけではなく、「体育理論」の学習を通して、互いに意見交換をしながら運動やスポーツを「する」「見る」「支える」「調べる」という4つの観点から生涯を通じて楽しんでいけるよう、考えを深めていく時間もありますから、様々な分野での新しい発見や自分の新たな可能性に気づくことができるのではないのでしょうか。

■ 芸術科

高等学校では、「芸術」という教科が新たに登場します。本校では、「音楽」「美術」「書道」の中から選択して1つを履修することができます。「別に勉強しなくても生きていくには困らないのでは？」という意見が最もあてはまりそうな教科ですが、どの高等学校でも必ず1科目は履修するよう定められているのです。そこには何か大きな意味があると思いませんか？古代から人間の創ってきた「文化」に関わる教科ですので、学んで得られるものは一人ひとり違ったものになりますし、そのよさを実感できる時期も人それぞれでしょう。ですが、これから生きていく将来、何らかの場面で心に豊かさをもたらすはず。そのことに気付くための礎となるものを笠岡高校で学び、いずれは「音楽」「美術」「書道」の枠だけにとらわれず様々な文化活動や鑑賞を通して、出会う人々と感動を共有できることを願っています。

1 「音楽」を学ぶ

私たちが音楽を聴いたとき、「楽しい♪」「泣けるな～」「感動!!」といった様々な感情を引き起こされます。それらについて、「なぜそのように感じるのか？」と考えてみたことはありますか？詳しくは「音楽心理学」という分野などになるのですが、リズム、音の高さや繋がり、音色、和音、テンポ強弱の変化、といった様々な「音」の要素が作用し、心(脳)で感情を動かす「音楽」として変換されるのです。面白いことに、一つの同じ曲でも、演奏する人が変われば必ず違った雰囲気になります。「どのような表現が自分は好きだろう？」そんなことを考え、深く聴く体験は、音楽の授業だからこそできる体験です。他の生徒の感じ方に触れてみると、また別の感性との出会いになります。音楽を知識として学んだ上で、自分の思いや感情を、「何となく・・・」ではない「伝わる表現」で演奏し、人に何か感じ取ってもらえると、素敵だと思いませんか？「音楽に国境はない」と言いますが、理解していない(意味のわからない)音楽文化にはとても高い壁があります。様々な音楽文化や感じ方に出会いその価値を尊重し、自分からも音楽のよさを発信し人々と平和的に繋がるためにも、音楽を学ぶことは一生の糧になるでしょう。ぜひ、そうなるよう、一緒に学びを深めてみましょう！

2 楽しい美術

美術の授業を通してみなさんに学んでほしいことは、「楽しむこと」です。本当の意味で美術を楽しむためには、画材を知り、技法を習い、対象を理解し、自分を見つめなければなりません。上手いかわないこともあるかもしれませんが、ステップアップするごとに楽しさは深まるはず。楽しむとは能動的な行為です。自ら楽しむことができるようになれば、授業が終わったあとも続く皆さんの人生に、美術がそっと寄り添えるのではないのでしょうか。

本質に迫る

たとえば、一輪の花の絵を描くとき、花の中心はどこにあるのか、葉の見えていないところの形はどうなっているのか、この線はどこから来てどこへつながっているのか、全体の流れはどうなっているのか、などを踏まえて形を描きます。それは、ものごとの「本質」を捉えようとする行為です。表面の出来事のみにとらわれず本質を見つけようとする態度は、基礎力としてあらゆることに応用ができます。

3 「書写」から「書道」へ

「書道」とは、中国や日本などのアジアを中心に発達した、文字を素材とする芸術です。みなさんが小中学校で学んできた「書写」は書道を学ぶうえで大切な土台となりますが、「書写」と「書道」では学習方法や目的は異なります。書写はお手本どおりきれいに書くことが求められますが、書道は先人たちの多くの名品を手本としてその技術を学び、自分の書を創り上げていくことが求められます。みなさんには授業を通して、字を美しく書く書写能力だけでなく、「①多様なものを受け入れる豊かな感性」「②自己を見つめ、探究していく姿勢」この二つのことを学んでほしいと考えています。

- ①…書道でお手本とする名品は多種多様であり、万人が美しいと思う作品ばかりではありません。しかし、それぞれに特徴や美しさがあり、学ぶことが多くあります。自分の嗜好や先入観にとらわれず、多くの作品に興味を持ち、みて、考えて、書いて、ということを繰り返しながら「多様な書之美」を味わうことを大切にしていきたいものです。
- ②…名品を学ぶだけにとどまらず、自分はどういったものを美しいと感じるのか、自分は何を表現したいのか、という自分と書道の在り方を模索し自分の書を探究していくことが、書道の本質的な面白さや難しさに迫るために必要です。高校書道の授業は、書の道の第一歩です。まず「書を楽しむ」という姿勢を大切に一步一步進んで行きましょう。

■ 英語科

1 日本人に「英語」はいらない!?

なぜ多くの日本人は、英語ができないのでしょうか？それはきっと「英語が喋れなくても普通の生活に何の影響もないし、日本で生活していて英語が使えないから困るということがほとんどない」からでしょう。ではなぜ日本で暮らす私たちが英語を学ばなくてはならないのでしょうか？それは受験のため？海外旅行をするため？外国の人々と友だちになるため？外国の映画や歌を自由に見たり聞いたりできるようになるためでしょうか？

世の中の「グローバル化」により英語は世界中で使われていて、当然のように「英語は必要」という流れになっています。しかし、それは、そのような環境にいるごく一部の人たちだけに限った話とってはいけないのでしょうか？今後、人間が行う仕事の約半分がAIやロボットにとって替われ、人の手が必要なくなるだろうと言われていて、AIによる翻訳技術がますます進歩すれば、英語を勉強する必要はないのではないのでしょうか？

2 日本にいても「英語」は必要！

英語は世界中で最も広く使用されている言語であり、より多くの人々とお互いに自分の意見や考えを伝え合うために欠かすことの出来ないコミュニケーションの手段です。あなたがどの分野へ進もうと、最も有益な情報源は英語なのです。世界のウェブサイトで使用されている言語のうち日本語はわずか5%しかありません。一方、英語で書かれた情報は実に全体の55%、ほぼ半分以上を占めています。英語を使いこなすことによって収集できる情報量は何倍にもなります。

これからの10年で日本は、人口減少・労働力低下・高齢化社会の影響で経済市場が小さくなると見込まれています。今まで以上に海外への売上比率をあげていかないと現状維持ができなくなると予想されています。日本を訪れる外国人の数は、現在の約2倍の6000万人になるとも予想されています。「Society5.0」においては、社会のあらゆる分野でコンピュータによる変革が起こると言われています。コンピュータを動かすのはプログラムであり、それは全て英語で記述されています。AIによる機械翻訳技術が発達すればするほど英語が世界中の言語の中心になってしまいます。英語が使えてITスキルの高い外国人技術者がIT企業ばかりでなく、金融、製造、サービス業などに大量に雇用されて、企業のトップや管理職にも外国人が増え、社内公用語を英語にする企業も増えてきています。皆さんが社会で活躍する頃の日本は、間違いなく今以上に多文化・多言語・多民族の人たちが、共存する国際的な環境の中にあることが予想されます。そうした中で私たち一人ひとりが、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会は飛躍的に増えていることでしょう。

3 「英語」を学びましょう！

英語を学ぶことで、あなたは自由に海外を旅することができます。旅行中にある多少のトラブルは、英語が話せるだけで解消できます。英語を習得すれば好きなところで暮らすこともできます。日常会話レベルができれば海外生活することは十分に可能です。英語で外国人とコミュニケーションをとれば、日本人にはない考え方に触れることができます。

英語を学ぶことで、自国の文化や価値観を見つめ直し再認識することにもつながります。狭い日本の中に閉じこもっていると、私たちは日本の常識がどこでも通用するのだと勘違いしてしまいがちですが、世界には様々な価値観を持つ人々が存在し、何が正しくて何が間違いなのか、私たちの「ものさし」だけでは判断できないこと気づくでしょう。

英語を学ぶことで、日本という国を客観視する手段を得ることができます。例えば、日本のことが海外ではどんなふうに報道されているのか？あるいは、日本語で報道される海外のニュースは、別の国ではいったいどのようなニュアンスで報道されているのか等といったことを知ることで、日本という国が外からどのように見えているのかをより客観的に知ることができるのです。

日本は先進国として、国際的な支援も積極的にやっているにも関わらず、日本に対する世界の評価はさほど高くありません。それは、控えめで自己アピール下手な国民性もあるとは思いますが、やはり「英語」という言葉の壁のために、自分たちの考えを世界に向かってきちんとアピールできていないことが何よりも大きいと思われる。

皆さんはこれから、世界に羽ばたいていきます。「絶対外国へは行かない！ずっと日本で暮らすんだ！」と思うかもしれませんが...人生何がわかりませんよね。英語というツールを身につけ、日本人としてだけではなく、地球人として、自分の未来の可能性をさらに広げ、自分の人生をより充実した豊かなものにしていきましょう！

■ 家庭

1 人生を考える勉強

人生80年の生活設計をしてみると、大学入学から後が何にも書けない人が時々います。行きたい大学や学部があり、それに向けて一生懸命頑張っていますよね。でも大学へ入学することが唯一の目標になっている人がいませんか。合格すればバラ色の人生が約束されているわけでも、不合格なら人生が終わるわけでもありません。18歳で人生が決まるわけではないのです。人生はずっと続いていくのです。むしろそれからの人生のほうがはるかに長いのです。

その人生を考える手助けの1つが家庭科の授業です。大学受験に関係なさそうですが、人生には大きく関係があります。誰でも自分の人生が幸せであってほしいと願うでしょう。しかし、幸せのかたちは人それぞれ違うはずです。どんな人生だったら自分は幸せなのか具体的に考えていきましょう。

また、誰も自分が育ってきた家庭やその考え方を「当たり前」と考えますが、家庭も考え方も家族の数だけあります。もし授業がなかったらその「当たり前」から抜け出すことは難しいでしょう。授業や友達との話し合い、新聞や書籍から得た新しいタイプの自分の理想の家族や生き方を探していきましょう。

2 家庭科は他教科と生活を結ぶパイプ

大学受験に関係なさそうといいましたが、実はそうではないのです。どの教科も大学受験のための手段ではなく、よりよい生活を考える際に必要なもので、家庭科はその教科と広くつながっています。食べ物が体内でどのような働きをするのか理解するために、化学や数学を勉強したい、服の流行の理解を深めるために歴史を知りたい、将来の生活について考えるために、政治経済、世界について知りたいといったように。逆に家庭科は理科や現代社会の実践編でもあり、進路を考える手がかりにもなる広範囲な分野を含んでいます。家庭科は個人の生き方を探る総合的な教科といえるでしょう。主人公である「私」の身近な衣食住から、家族、地域社会、国際関係にまで「私」が繋がっていきます。

調理・裁縫の技術の習得がメインだった昔の家庭科は、いまや生きることを教える場になっています。青年期の仕上げ教科といえるのではないのでしょうか。

<参考図書> こんな本も読んでみてください。

人生で大切なことはすべて家庭科で学べる ふくしまの男性教員による授業 末松 孝治 (著)

正しいパンツのたたみ方——新しい家庭科勉強法 (岩波ジュニア新書) 南野 忠晴 (著)

人生の答えは家庭科に聞け! (岩波ジュニア新書) 堀内 かおる (著)、 南野 忠晴 (著)

■ 情報

1 なぜ教科「情報」を学ぶのか（高等学校学習指導要領解説より）

近年情報技術は急激な進展を遂げ、社会生活や日常生活に浸透するなど、みなさんを取り巻く環境は劇的に変化しています。今後人々のあらゆる活動において、そうした機器やサービス、情報を適切に選択・活用していくことがもはや不可欠な社会が到来しつつあります。それとともに、今後の高度情報社会を支える IT 人材が今以上に必要とされています。こうした現状から、小・中学校では、情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる力や情報モラル等、情報活用能力を含む学習を行なってきました。高等学校情報科では、生徒の卒業後の進路等を問わず、情報の科学的な理解に裏打ちされた情報活用能力を身につけることが重要であり、高校生の素養として「情報」を学ぶ必要性が高まってきたのです。

2 教科「情報」は以下の3つを身につける事を目標としています

（1）情報と情報技術及びこれらを活用して問題を発見・解決する方法について理解を深め技能を習得するとともに、情報社会と人との関わりについての理解を深めるようにする。

情報と情報技術についての知識と技能（いわゆるPCやiPadを利用した実習）、情報と情報技術を活用して問題を発見・解決する方法についての知識と技能（総合的な探究の時間をはじめとした他の教科でも活用する探究手順）を身に付けるとともに、情報社会と人との関わりについては、情報に関する法規や制度及びマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報と情報技術の理解（便利なツールは便利に使えばよいが、それが他に与える影響について考える力）と併せて身に付けるようにする。

（2）様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する力を養う。

情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、様々な事象を情報とその結び付きの視点から捉え、複数の情報を結び付けて新たな意味を見いだす力を養うとともに、問題を発見・解決する各段階で情報と情報技術を活用する過程を振り返り改善することで、情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する力を養うこと。（情報収集と活用はネット検索だけでなく、書籍や新聞、インタビューやアンケートなど、様々な手法があります。それぞれの良さを知り、適切に活用し、振り返ることが求められます。）

（3）情報と情報技術を適切に活用するとともに、情報社会に主体的に参画する態度を養う。

情報と情報技術を適切に活用することを通して、法規や制度及びマナーを守ろうとする態度、情報セキュリティを確保しようとする態度などの情報モラルを養い、これらを踏まえて情報と情報技術を活用することで情報社会に主体的に参画する態度を養うことが必要です。（デジタル・シチズンシップの考えに基づいて、行動規範をそのまま学ぶのではなく、善し悪しを自ら考える力をつけていきます。）

教科「情報」では、上記の（1）～（3）の内容を講義や実習の中で学んでいくことにより、情報技術の特性を理解しながら活用し、豊かな「表現力」や「コミュニケーション能力」を身につけていきます。特に情報収集・判断・表現・処理・創造のスキルは、情報社会を生きていく皆さんにとって必要不可欠なスキルと言えるでしょう。

皆さんが持っている iPad の扱いは、包丁の扱い方になぞらえて考えることができます。「おいしい料理」を創ることができる道具でもあり、使い方を間違えると自分自身や人を「傷つける」道具にもなります。教科情報をベースキャンプとして、創造的な活動に使ってもらいたいと思います。

さらに情報 I は、数学 I における「データの活用」、物理基礎における「音の性質」、公共（2年次履修科目）における「公共的な空間における基本原理」など他教科との連携が重視されている科目です。この教科の趣旨のとおり、様々な教科から得られた情報とその結びつきの視点をもって、学習に取り組みましょう。相乗効果として総合的な力がつくことでしょう。